

東福寺 阿弥陀如来の縁起 (下)

その後、如来を納め奉らんがために、一字の坊舎を建立し、唯一筋の菩提を願うためならば、菩提山東福寺と名付、聖人の御筆染め給う正向の阿弥陀尊なれば、院号を正向院と称し、ひさしく聖人の御旧跡たれと因しところ、慶長年中、はからざる火災にかかり、仏殿をはじめ諸造をのこらず焼失せるに、この如来を梵焼し奉りしことを諸人いたくなげき、焼跡の灰かきならしけるに、この尊影いつとなく独り火中より出現して山門のかたわらなる松の古木その西にさしたるこずえに此の一軸かからせ、赫赫として光明を放ち給うを諸人これを伏しおがみ不思議の思かなし、それより里人霊筆の仏徳を敬讃して火中出現の如来と称し奉る。そのかからせ給う松を「みだかかりの松」と唱えける。西にさしたる枝、自然に霊樹の形を造りしかば、聖人の旧跡を訪ぬる人人遠近をとはず尋ね来り拝み奉り神変不思議の功德を知るなり。その頃何処からともなく一人の女性来りて聖人の御真筆の如来像を拝みたき由申しければ、即ち拝さしむるに歓喜涙を袖につつま余念なく合唱礼拝して立ち去りける。容儀あたかも神女の粧をふくみければ、住僧これよくつねならむ人と思ひ、ひそかに門外を

見送りした念仏の声もろともに、にわか立ちいづる靈香四方に薫じ称名空に聞こゆると思うに忽ちかき消えるごとくに見えて失せり、ここに住僧あ不思議かなと驚歎して思ひけるは、これ正しく神明天神の方便に女形を表し来り如来を拝ましたものにありけると、うわさ近隣にいたりただ稀有のおもいをなし、いよいよわれ人信心を生ず、又難病の流行することありてその病の甚しきに至り又難産の及ばざるには、この如来の御影をうつしたまえる水をあたえければ速やかに病苦を除き難産つつがなく出生するなり、実に救誓大悲の巨益いかでかならんや渴仰随喜のともがら心命をなげうち来世に生まれ罪深きわれら仏恩のかしこきことを仰ぎ信心をこらし拝すべしとは臨終の夕には早く来迎ましまして大悲与願のみ手を伸ばさせ安養浄土へ導きたまうなり、誠に御真筆火中出現の如来と称し一たび拝するともがらは永く一蓮同生のちぎりを得さしめ給うこと疑いあるべからず。有信の貴賤男女へ結縁弘道のため略して畫の由緒を云々

干時慶長五年庚子十月

武蔵国勝鹿郡八丁目住人

修驗東覚坊末孫

道香謹書

右訳録は慶長五年焼失のため、当寺草創東覚坊の末孫道香の記す所破損によりて後世の為に書き替え置き伝えるものなり。

正徳五年乙未八月菩提山現住 憲峯 花押

とある。憲峯和尚は東福寺の五世の住職である。

またこの寺の境内北西側に小さな祠がある、これを一名「みみだれ不動尊」と云う。この寺の中興開山良伝和尚の墓所であるが、命日が不動尊の縁日二十八日になるので石塔に不動尊を刻み祀つてある。耳の病を治す不動尊として信仰されている。

初出「広報かすかべ 昭和五十五年十一月」かすかべの歴史余話

